

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	オリーブまなびの家（児童発達支援）		
○保護者評価実施期間	2026年 1月 7日		～ 2026年 1月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)		(回答者数)
○従業者評価実施期間	2025年 12月 1日		～ 2025年 12月 27日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)		(回答者数)
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 1日		

○分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	5領域に基づいた専門的支援と特性に応じた教材・環境の工夫	お子様の特性や発達段階を5領域（健康・生活、運動・感覚、認知・行動、言語・コミュニケーション、人間関係・社会性）の視点で分析し、一人ひとりの興味・関心や課題に合わせた個別教材の作成や支援内容のカスタマイズを行っている。また、集中して取り組めるよう、特性に応じて活動スペースを分けるなどの環境設定（構造化）を柔軟に実施している。	既存の教材や支援手法に捉われず、最新の知見を取り入れた自作教材のバリエーションを増やすことで、お子様がより「できた」「わかった」を実感できる成功体験の場を広げていく。また、個別の教材が日常生活の様々な場面でも活用（般化）できるよう、支援内容のさらなる検証・改善を継続する。
2	ICTツール（HUG・LINE）の多角的活用による迅速な情報共有と支援の質の維持	HUGシステムを導入し、日々の連絡帳をアプリ化することで、保護者への活動報告をリアルタイムかつ詳細に行っている。また、公式LINEを開設したことで、保護者からの急な連絡や相談を常勤職員が即座に共有し、迅速かつ漏れのない対応を組織的に実施できている。	デジタル上でのやり取りを蓄積・分析し、個々の児童の長期的な成長記録としてアセスメントに有効活用する仕組みを強化する。また、ICT操作が苦手なご家庭に対しても、対面でのフォローを組み合わせる「二段構えの連絡体制」を継続し、全ての保護者との信頼関係を深めていく。
3	地域社会とのインクルージョン推進	8月の「夕涼み会」での地域住民招待や、地域イベント「彩りマルシェ」への参加を通じ、子どもたちが社会の中で多様な人と交流する機会を積極的に創出している。	地域住民との交流機会をさらに増やすとともに、不審者対応や事故防止など安全面を考慮した地域連携のあり方をマニュアルに反映させ、安心・安全な地域交流を継続する。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	教育機関（幼稚園・小学校）との多層的な連携体制の構築	認定こども園等へは直接訪問し、園での様子を情報共有するなどの連携ができていますが、小学校については直接的な連携の機会を得ることが難しく、接続に課題を感じている。	園への訪問・連携を継続するとともに、直接の連携が難しい小学校等については、保護者を通じて先生方へお子様の様子を確認するなど、間接的な情報共有を強化する。
2	アセスメントプロセスの効率化と精度向上	JSI-R等のツールを使用しているが、ヒアリング項目が膨大であり、記録や分析に要する負担が大きいことが、迅速な計画反映への障壁となっている。	アセスメント項目の精査を行い、デジタルツールの活用を含めた手法の見直しを検討することで、より短時間で的確にお子様の状態を把握できる体制を整える。
3	家族全体を支える支援（きょうだい支援）の周知と充実	保護者アンケートにより、きょうだい向け支援の認知度が低いことが判明した。人員やスペースの制約上、頻繁なイベント開催は困難だが、既存の行事での受け入れ体制が十分に伝わっていなかったことが要因と考えられる。	新たなイベントを増設するのではなく、「夕涼み会」や「マルシェ」等の既存行事において、きょうだい児も参加可能であることを改めて強く周知し、家族単位での交流機会を確実に提供する。 また、日々の面談や公式LINE等を通じて、きょうだい児の育児に関する悩みも相談できる体制（家族支援）であることを明文化し、保護者が心理的に頼りやすい環境を整える。